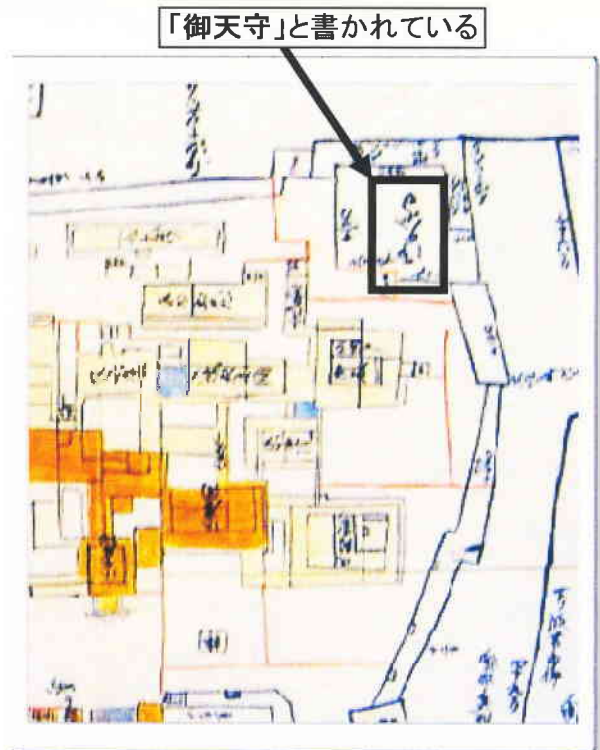
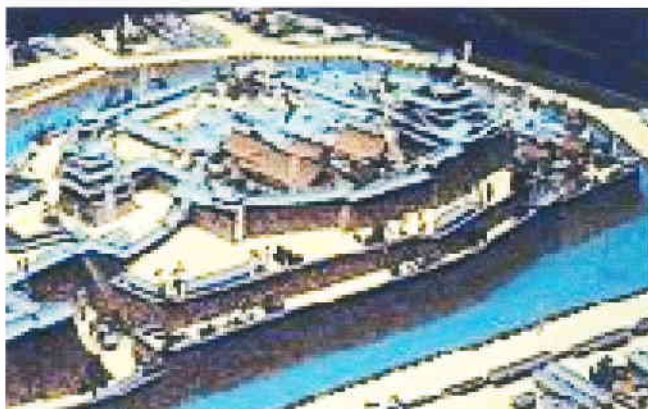


78 豊臣期の天守閣跡

- 豊臣期の天守閣は39mの高さがあり、3階建ての屋根上に更に3階建てを載せた望楼型で、安土城天守閣を受け継いだ造りとなっていました。場所は、現在の大坂城天守閣がある場所とは若干異なり、北東方面(約100m)にありました。



豊臣期の大坂城天守閣



現在の天守閣から見た豊臣期の天守閣跡

79 残念石

- この石は大坂城修復の時、天領(徳川領)小豆島で割られたまま、用材石としての念願がなわず、現在でも数多く残されていることから「残念石」と呼ばれています。ここにある大きい方の石は、黒田長政(筑前)の石切丁場で見つかり、小さい方の石は細川忠興(豊前)の石切丁場で見つかりました。これらの石を小豆島青年会議所が創立十周年の記念事業として、昭和56年7月にここに運び込みました。



80 徳川期の天守閣跡

- ▶ 元和6年(1620)1月、第2代将軍 徳川秀忠の命により、65家の外様大名を中心に、大坂城の再建が進められることになりました。およそ10年間工事を行い、寛永6年(1629)に完成します。
- 徳川秀忠は大坂城を単に復興するのではなく、豊臣期のものよりも2倍の規模にしようとし、築城の練達者 藤堂高虎に基本設計を任せます。
- 徳川期の天守閣は、現在の大坂城天守閣の位置に建てられました。
- 豊臣期の天守閣は、現在の位置よりもやや北東に建てられていました。
- 石垣や堀の深さは、豊臣期のものより規模が2倍大きいものでした。
- 現在残っている石垣は、この時期のものです。
- 徳川の威信をかけた築城で、豊臣期の天守閣の高さが約39mだったのに対し、新しい天守閣の高さは約58mでした。
- 寛永6年(1629)の完成からわずか**36年後**の、寛文5年(1665)1月、珍しい冬の落雷により天守閣は焼失します。
- この頃、江戸城も天守閣を失っていましたので修復する余力がなく、この焼失後、大坂城の天守閣は昭和6年(1931)まで、約300年再建されませんでした。



81 豊公館跡

- ▶ 大正14年(1925)3月15日～4月30日に「大大阪(だいおおさか)記念博覧会が天王寺公園を第一会場に、大阪城を第二会場として開催されました。
- ※大阪市は隣接する東成・西成両郡の町村と合併し、人口200万人を超える国内随一の大都市となり、「大大阪(だいおおさか)」と呼ばれました。
- 第二会場が大阪城で開催されるにあたり、天守台に二層の仮説建物が建てられ、「豊公館」と名づけられました。
- 豊公館の外観は、桃山様式に則って造られました。1階は豊臣秀吉の遺品や、その時代の歴史資料が展示され、2階は展望台となっていました。
- 豊公館には、わずか45日間の会期間中にもかかわらず、69万8386人の入場者がありました。豊公館の人気の、のちの天守閣復興につながっていきます。

豊公館



82 姫 門 跡

- ▶ 天守閣から山里曲輪に通ずる門として姫門がありました。



83 山 里 曲 輪 跡

- ▶ 天守閣の北にあり、本丸とは高い石垣に隔てられています。豊臣秀吉やその家族らが茶会や花見を催しました。

大坂夏の陣で落城の際、淀殿と豊臣秀頼が山里曲輪で自刃したと伝わっています。



84 秀吉の生母 大政所の住居跡

- ▶ 山里曲輪に秀吉の生母、大政所の屋敷がありました。



85 大坂夏の陣殉死者三十二名忠霊塔

- ▶ 大坂夏の陣で殉死した32名の忠霊塔です。豊臣秀頼を支えた側近や武将32名の名前があります。淀君のほか大野治長、真田幸村の子 真田大助の名も見えます。



86 刻印石

- この広場は大坂城築城400年を記念し、石垣を形成している刻印石を展示、紹介するために新設されたものです。
大坂築城には外様大名を中心にあたらせ、大名間を競わせる方式を取りました。
そのため、地元から運んだ石がわかるよう、石に家紋等の刻印をつけました。

